

ワンポイント・ブックレビュー

西田ひろ子編著『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』（風間書房、2008年）

異文化間コミュニケーション摩擦は、グローバル化が進む現代で解明が最も必要とされている現象である。本書は、その解明に挑んだ調査に基づいたシンポジウムの結果をまとめたものである。

これまでの異文化間コミュニケーション研究に対する反省を踏まえて、現場での活用という視点から新たな調査研究を強力に押し進めた著者たちの成果が本書の形となって結実している。

その解析のための理論的装置はややわかりにくく、「認知理論」に触発され、「文化スキーマ理論」へと至る理論構築が、異文化間コミュニケーションの問題を最も説明するものとして提起されている。この結果、本書は、異文化コミュニケーション摩擦という現象を認知科学、脳科学の研究成果を基に解明しようとするものとなっている。すなわち「文化が異なれば、同じような状況に置かれても異なった行動・考え方をする」という現象を説明するための理論の提起が本書の目的である。そして本書で紹介される各種調査は、こうした文化スキーマ理論に基づいた手法でデータの収集が行われている。

本書で最も注目した部分は、異文化間コミュニケーションの問題を海外進出日系企業のケースに基づいて分析した章である。異文化間の摩擦の問題を単なる考え方や立ち振る舞い、好き嫌いといったレベルの問題にとどめずに、企業、職場、仕事といった具体的なものを通して解明する試みをしているからである。

紹介されたケースの中で特に興味深かったケースは、マレーシア進出日系企業の「日本的経営管理」が「イスラム」と直面した時のものである。「どのようにして、イスラム系従業員の職業倫理はもたらされるのか」をはじめ、「どの程度まで、日本の管理システムとイスラム系従業員の価値観は企業の中に持ち込まれているのか」「管理システムの日本的倫理や日本人管理職の言動が、イスラム的職業倫理とどの程度まで協調しているのか」「企業の要求に対しイスラム系従業員は信仰をどの程度まで優先しているのか」など、いずれも国内外とも国際化が進む日本にとって避けては通れない問題にぶつかっていたからである。

しかしながら本書における少数の調査事例だけでは、「日本的経営管理」と「イスラム」という異なった文化的、宗教的背景を持つ両者の共存可能性の問題を解決できないかもしれない。特に調査事例におけるイスラム教の労働者が、「イスラム教を優先しているにもかかわらず、日本企業の中でも確かに成功している」という報告は、その成功に至った文化間の微妙なバランスを解明することなしには、意味をなさないであろう。本書の異文化間コミュニケーション研究が、研究成果の現場での活用という視点から行われた調査研究であることから、その解明が要請される場所である。（西村博史）